年間第26週　木曜日　10月1日

永遠に価値あるもの

聖テレジア（幼いイエスの）おとめ教会博士

第一朗読（ネヘミヤ8章1―4a・5―6・7b―12節）

1 民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。彼らは書記官エズラに主がイスラエルに授けられたモーセの律法の書を持って来るように求めた。2 祭司エズラは律法を会衆の前に持って来た。そこには、男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日のことであった。3 彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた。

4 書記官エズラは、このために用意された木の壇の上に立（った）。5 エズラは人々より高い所にいたので、皆が見守る中でその書を開いた。彼が書を開くと民は皆、立ち上がった。6 エズラが大いなる神、主をたたえると民は皆、両手を挙げて、「アーメン、アーメン」と唱和し、ひざまずき、顔を地に伏せて、主を礼拝した。

7 レビ人がその律法を民に説明したが、その間民は立っていた。8 彼らは神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した。

9 総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは、律法の説明に当たったレビ人と共に、民全員に言った。「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。」民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。10 彼らは更に言った。「行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」11 レビ人も民全員を静かにさせた。「静かにしなさい。今日は聖なる日だ。悲しんではならない。」12 民は皆、帰って、食べたり飲んだりし、備えのない者と分かち合い、大いに喜び祝った。教えられたことを理解したからである。

福音（ルカ10章1―12節）

1 その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。2 そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。3 行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。4 財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。5 どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。6 平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。7 その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。8 どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、9 その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。10 しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。11『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。12 言っておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む。」

朗読から祈りへ

―泣くほどに―

民の前で律法を読み上げる書記官エズラ。夜明けから正午まで。その律法の書に耳を傾ける民。立ち上がり、ひざまずき、顔を地に伏せて主を礼拝する民。レビ人がその律法を民に説明する。人々はその朗読を理解した。民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。この律法は単なる法規ではなく、恵みをもたらす神の教え。人々に命の力を与える神からの呼びかけ。それを聞く民は喜びに満ちあふれる。

ミサを思う。主ご自身が整えてくださった「命のことば」と「命のパン」。それはわたしたちに生きる力を与える。幼少の頃から感じていたことだが、ミサでは聖体祭儀が中心となり、「聖変化」がもっとも大切な部分とされていた。そこが中心であり、それまでは準備の時間。「聖変化」が終わると聖堂の扉が閉められていた時代もあった。「命のことば」がおろそかにされていたようにさえ感じていた。その傾向は今もなお続いている。

今日の朗読を聞くと羨ましくさえ思う。読み上げられる律法の力。それを聞く民の熱意。そして、湧き上がってくる喜び。ミサのことばの典礼は「前座」ではない、わたしたちはそこで朗読される「神のことば」を聞く。イエスが受難と十字架の死をもって証しした愛のことば。いのちのことば。それは、わたしたちを生かし、励ます。

しかし「泣く」ほどまでに真剣に耳を傾けたことはあまりない…。

―「すでに」と「まだ」―

イエスは、ほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。そして宣教する際の心構えを教えられた。派遣されたかれらが言うこと。「この家に平和があるように」。「神の国は近づいた」。

弟子たちの使命は「神の国」の到来と「神の支配の実現」を告げること。

今は、すでに神の国の中にある。今は、すでに神の支配に包まれている。しかし、まだ人々はそれに気づいていない。二千年前に主は言われた。主ご自身、宣教を始めるときに。「神の国は近づいた。回心して福音を信じなさい」。「神の国はすでに来ている」。弟子たちの使命、そしてわたしたちの使命はこの福音を告げ知らせること。すでにわたしたちは神のみ手の中にある。復活した主がともにいてくださる。かれが道であり、真理であり、命である。しかし、それはまだ知られていない。わたしたちは「すでに」と「まだ」の世界に生きている。

どのようにして福音を告げるのか。

福音的な価値観を生きること。神と人とのつながりを大切にすること。無くなってしまうモノに囚われるのではなく、永遠に価値あるものを大切にすること。自己中心に生きるのではなく、愛、思いやり、赦し、励ましをもって他人と共に生きること。「貧困と闘い平和を築く」こと（今年の「世界平和の日」の教皇メッセージ）。わたしたち人間がどんどん壊していってるこの世界。自然も、社会も、そして人も。弟子たちの派遣は「狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」と主は言われた。今日も主は言われる。そこに「行きなさい」。

（M・M・Y）